

《資料紹介》

『定本横光利一全集』未収録資料紹介

——「長篇の基礎道徳」——

中井 祐 希

河出書房新社版『定本横光利一全集』に収録されておらず、その後も管見の限り報告がなされなかったと思われる資料を発見したので紹介したい。

今回紹介するのは、『長篇小説』第一巻第二号（長篇小説刊行会、一九三七・四）に掲載された「長篇の基礎道徳」という文章である。本資料は、既に『昭和文学年表』第二巻（明治書院、一九九五・五）の「評論・随筆」の段（49頁）に記載されているが、横光利一研究においては、これまで言及されてこなかったようである。現在、『長篇小説』の当該号は神奈川近代文学館にて閲覧することができる。以下、本文の翻刻と解題を記す。翻刻にあたっては、表記は旧仮名とし、旧字体は新字体に改めた。

一 本文（全文）

長篇小説に関する感想は沢山ありますが、これを書き出せば際限がありません。殊に一番肝心のところは作家の秘密に属することはかりでありますから、書く方法もないわけです。しかし、長篇小説には二種類あると私はつねづね思つてゐます。

このやうなことを、こんなに書きたいと思つてその計画に従つて書くこと——いま一つは、

このやうなことを書きたいが、書いてゐるうちに何ものが頭の中から飛び出して来るか分らない予想を準備として始めること。

先づこの二つだと思います。このやうに書けば当り前のことで、誰でもこれに氣附いてゐることあります。しかし、

この二つを明瞭に意識して事を行ふについては、哲学がなければ出来ぬことと思ひます。殊に後者の場合、つまり、何者が頭の中から飛び出すか分らぬといふ不安と好奇心とをどのやうに自分が取り扱ふかといふことについて、その作家の価値も定り、作品の質も定るのでありますから、一番厄介なこととは皆ここにひそんでゐるのだと云つても良くはないかと思ひます。思想が公式化して頭の中に巢喰つてしまつた人々は、湧き出す力も無くなりやすくなつてゐると同時に、たとへ湧き出して来たものでも、それがどんなに尊いものであらうと捨ててしまつて良しとします。ここには覚悟があります。私はそれで立派と思ひます。しかし、自分の頭から出て来たものであるからには、たとひどのやうなものでも高下の差別などあらう筈はありません。自分が自分の内部を見て、どれが一等でどれが三等でと思ひ得られる頭といふものは、それは他人の頭が自分の頭の中に大部分を占めてゐるからだと思ひます。

すでに他人の見てしまつたものを利用して、世の中を見廻し歩く長篇の力といふものは、すぐに死んでしまひます。

公式が人を殺すのです。作家は人を殺すものに罰を与えるのが職業です。それ故、多くの作家は、先づ常に自分に真つ先に罰を与へてかかります。これが作家の何よりの美德だと思ひます。この美德なくしてもし公式といふ莊嚴美麗なもの

を使用する作家があるなら、その人は不徳を冒したものと云はねばなりません。しかも、この不徳を良しとして進む表に現れた通俗良心といふものは、ときどきこのやうないたずらをやらかして笑つてをります。この良心の底に沈むものの眼を見ることが、新しい長篇の基礎道徳だと思ひます。人間の行為も批判もすべてここからの再出發をしてゐるのが近代といふものだと思ひます。

二 解題

「長篇の基礎道徳」は冒頭にも記した通り、『長篇小説』第一卷第二号に掲載された。発行元は長篇小説刊行会²⁾である。『長篇小説』については、『日本近代文学大事典』(第五卷、講談社、一九七七・一一)に立項されていない。しかし、『長篇小説』創刊号(一九三七・三)の「編輯後記」には、発起人である立野信之が創刊に至る経緯を記しているので確認しておきたい。

最初、僕が千葉県の田舎に住んでゐた頃ひとり計画し、武田・徳永両氏に相談相手になつてもらひ、それでは出さうと極つたのが去年の三月だつた。さつそく文壇・雑誌新聞社関係者に趣旨書³⁾を配布し、この運動に理解をもつて援助してくれさうな作家に案内状を出して新宿の白十字で相談会をもつた。その時参加してくれた人達は、

石川達三、島木健作、細田民樹、尾崎士郎、高見順、本庄陸男、松田解子、舟橋聖一、田村泰次郎^マ井上友一郎、武田麟太郎の諸氏であった。そこでは、別にいゝ智恵もでなかつたが、長篇小説運動は大いにやる必要があること、そのために雑誌を出すことは時宜を得たことであるから、大いに助力しよう、といふ申合せをして散会した。その後、「編輯後記」には、資金の問題のため創刊までに一年近くかかったこと、執筆者からは無報酬で書いてもらっていることなどが記されている。

雑誌名からもわかる通り、本雑誌は同時期の長篇小説運動の機運の中、創刊されたものである。武田麟太郎・徳永直・立野信之の連名で書かれた創刊号の巻頭言「長篇小説」刊行に際して」には、「純文学作家の新聞小説への進出、同人雑誌に拠る新人たちの長篇への野心的努力、そして書下ろし長篇の出版等」といった文壇状況を踏まえ、「長篇小説運動の理論、作品の検討、長篇小説の研究」を目的として刊行されたとある。現在、『長篇小説』は全五号まで確認できている。各号の目次を概観してみれば、創刊号には「この運動をいかに見るか」、第三・四号には「長篇名作を書いた頃」、第五号には「国民文学の問題」といった特集が設けられ、著名な作家の名前も散見できる。また、執筆者は作家・評論家だけにどまらず、雑誌や新聞社の関係者も原稿を寄せている点が

興味深い。

横光の文章が掲載された第二号の目次を確認してみると、横光の「長篇の基礎道徳」に加え、豊島與志雄「文学の貧困・室生犀星「感想」・尾崎士郎「私信」(どれも長篇小説に関する私見を述べた文章)が枠で囲まれている。第二号の「編輯後記」には「豊島、横光、室生、尾崎の諸先輩作家から、わざわざ稿を寄せられた」とあるため、その四人の文章を小特集のような扱いにしたのであろう。

さて、横光利一と長篇小説との関係でいえば、「純粹小説論」(『改造』一九三五・四)内にて、「短篇小説では、純粹小説は書けぬ」と述べ長篇小説を志向していったことを思い起させる³⁾。本資料は、長篇小説運動が活発化された時代において、横光の長篇小説への考えや執筆姿勢がうかがい知れる点で注目し値する。特に欠かせないのは、掲載時期である一九三七年四月に、「旅愁」(『東京日日新聞』一九三七・四・一三)と「春園」(『主婦之友』一九三七・四)の連載が開始されたことにある。本文を読み進めていき、横光の長篇小説に対する考え方を簡単ではあるが押さえていきたい。

本資料の冒頭部で横光は、長篇小説の創作姿勢について、「このやうなことを、こんなに書きたいと思つてその計画に従つて書くこと」と「このやうなことを書きたいが、書いてゐるうちに何ものが頭の中から飛び出して来るか分らない予

想を準備として始めること」の二つがあることを述べている。しかし、前者のような執筆姿勢においても、少なからず「何ものが頭の中から飛び出して来る」場合があると想定し次のように続ける。

しかし、自分の頭から出て来たものであるからには、たとひどのやうなものでも高下の差別などあらう筈はありません。自分が自分の内部を見て、どれが一等でどれが三等でと思ひ得られる頭といふものは、それは他人の頭が自分の頭の中に大部分を占めてゐるからだと思ひます。／すでに他人の見てしまつたものを利用して、世の中を見廻し歩く長篇の力といふものは、すぐに死んでしまひます。

仮に執筆を続けていく中で湧いて出て来たアイデアがあつたとしても、それを無視して当初の計画通りに進めていくことは、事前に思つていたことと、執筆中に湧いて出て来た要素を比較し、後者を自然と低く見積もつてゐることになりはしないかと横光は懸念する。そして、こうした見積り方や格付けすることの基準それ自体が「他人の頭が自分の頭の中に大部分を占めてゐるからだ」と横光は考察していく。若干の論理の飛躍が感じられなくはないものの、ここで示されてゐるのは、当初の予定通りに執筆していくといひわば「公式化」に対する疑義と、他人が見てしまつたものや常識をその

まま無批判に踏襲するのではなく、自分の頭の中から「飛び出して来る」何ものかに対する期待である。最終段落で横光は次のようにまとめている。

公式が人を殺すのです。作家は人を殺すものに罰を与へるのが職業です。それ故、多くの作家は、先づ常に自分に真つ先に罰を与へてかかります。これが作家の何よりの美德だと思ひます。この美德なくしてもし公式といふ莊嚴美麗なものを使用する作家があるなら、その人は不徳を冒したものと云はねばなりません。しかも、この不徳を良しとして進む表に現れた通俗良心といふものは、とまどきこのやうないたずらをやらかして笑つてをります。この良心の底に沈むものの眼を見ることが、新しい長篇の基礎道徳だと思ひます。人間の行爲も批判もすべてここからの再出発をしてゐるのが近代といふものだと思ひます。

「公式が人を殺す」、「作家は人を殺すものに罰を与へる」という定義のもと、横光は「多くの作家は、先づ常に自分に真つ先に罰を与へる」存在であり、それが作家の「美德」でもあるとみなす。言い換えれば、作家は「公式化」に抗つていく存在でなくてはならないということである。これに対し、「公式」に頼り切つて長篇小説を執筆していく作家は、世の中の常識や考え方が集積された「通俗良心」に絡み取られて

いく危険性があると横光は説いていく。以上のことから、これからの長篇作家は、「通俗良心」を批判的に分析し、そこから零れ落ちたものを掬い取り、創作に反映させていくことが「新しい長篇の基礎道徳」であると結論付けていく。

このような姿勢は、ヨーロッパから帰国後、どのように自身の欧州体験を長篇小説として組み入れていくかといった問題とも通底しているだろう。例えば、横光が帰国直後書いた文章には次のようにある。

自分の生れた国土にじつと動かずに生活してゐると、世界の見方が、誰かから教へられた見方を応用させて、あれこれと考へてゐるものだが、さて一度国土を離れ、自分の眼で直接実況を眺めて観察すると、ひどく今迄の考へとかけ離れた実物となつて世界が現れて来る。しかし、これを人に伝へる方法はない。何かと語り、話さうとすれば、やはり、今までの人々の説明したごとく表現するのが、むしろ安全なことだと思はれて来る。私は今いろいろなところから、異国のさまを書けと云はれてゐるけれども、頭は痴呆のやうに茫然となり、どこから糸口を引き出して良いやら分りかねる。（「無題」『横光利一全集月報』九号、非凡閣社、一九三六・一〇）

横光は、従来の「公式化」されたヨーロッパのイメージに沿つて語ることが「安全なこと」だと考へてはいるものの、

そのような姿勢で長篇を執筆していくことへのためらいも同時に感じている。「長篇の基礎道徳」での、「すでに他人の見てしまったものを利用して、世の中を見廻し歩く長篇の力といふものは、すぐに死んでしまふ」といった言葉とも通じ合うだろう。そして、横光はそのような「安全」で「公式化」された方法ではなく、「今迄の考へとかけ離れた実物となつたヨーロッパを表象しよう」と試みていく。だとすれば、「旅愁」で横光が描出しようとしたバリは、従来のような「公式化」されたそれとは異なる光景が描かれている、もしくは描こうとしたと言ひ換えることができる。以上のように考へてみると、「長篇の基礎道徳」は、長篇小説「旅愁」をどのように執筆していくかという態度表明とも捉えることができるだろう。

注

(1) 日本近代文学館にも『長篇小説』は所蔵されているが、第二号のみ欠号であった。

(2) 長篇小説刊行会も『長篇小説』同様、立野信之・武田麟太郎・徳永直らが中心となり設立された。同会においては、一九三五年時点で立野信之「長編小説刊行会」の提案が『文学評論』（一九三五・四）に掲載されており、長期にわたり長篇小説運動について彼らが注視し準備していたことがわか

る。

- (3) 趣旨書の全文については、立野信之「長篇小説刊行会」の仕事をはじめるに就て——本誌読者にお願ひ——」(『文学評論』一九三六・四)にて掲載されている。ここでは次のように提言されている。「私達は、その(論者注・長篇小説の)試みの第一歩として、「長篇小説刊行会」の仕事をはじめます。先づ手始めに「長篇小説」といふ題名でこの四月から小雑誌を出します。これによつて一方長篇小説への機運を助成すると共に他方長篇作家の動向や、出版界の状勢の具体的な報導、また長篇小説の研究等、謂はゞ「裏」からこの自主的な長篇小説運動を開始したいと思ひます」。なお趣旨書の最後には、長篇小説運動について所感や、長篇小説の構想の有無についての質問文が添えられており、それに対する作家達の回答が『長篇小説』創刊号と第二号に掲載されている。
- (4) 横光と長篇小説との関係については、古矢篤史の詳細な研究があるので参照されたい(『横光利一の〈長篇小説〉に関する研究——一九三〇—四〇年代の〈日本〉をめぐるメディアとテクストの展開』早稲田大学博士論文、二〇一五・四)。